

段注の否定を表わすいくつかの助辞について

大橋 由美

いったい清代とは、中国語を近代的ともいえる科学的な手法によって学問的に理解しようとした時代であったといえよう。所謂清朝考証学（考據学とも）による学問態度によつて、その精華が開いたのであった。

中国語の助辞または虚詞などと稱される一連の語については、高く評価される専著として王引之（1766—1834）の『經傳釋詞』がある。同書に先立ち既に十七世紀末の劉淇（生卒年未詳）が一〇〇年前に『助辭辨略』（1711年）を著わし、虚字を三〇種類に分け六種の方法によつて説明したが、引之は殊に經義を解釈し通じさせるために、秦漢以前の書から虚字を説いたといわれる。また引之の父である王念孫（1744—1732）は『廣雅疏證』を著わした。虚字に対する理解認識が科学的な考究を経て一定の程度に達していたことの証といえよう。

段玉裁（1735—1815）はその王念孫と共に戴震（1723—1777）の高弟である。段氏にこのような虚字についての専著はないが、『說文解字』（以下『說文』と略す）の各字に解釈をした『說文解字注』（以下段注と略す）がこれに相当することは疑いない。「この世界」全てを表わすあらゆることば（文字）を記した『說文』に施す注であるから、必要な注でありながら十分であり、且つ虚字相互に有機的な関連が認められると考える。段氏独得であり、しかも専著とは異なる視点からの解釈、即ち段氏の古音説に立脚した文字説、殊に用字法の一つである假借説の一端が往々に見られると考える。

そもそも所謂六書として一括されるもののうち、転注と假借とは、他四者が創字法であることに對し、製られた文字の用法をいう。うち、転注については従来より盛んに論じられているが、假借については「当て字」とされ、異論はないようである。^①しかし、六書の殿として『説文』叙に説かれる假借は、段氏によれば、文字用法上重要な考え方を表わすものと考えられる。従つて、本稿では、文字（ことば）の構造よりむしろ用法として重要である助辞の、特に段氏の古音説や訓詁に基く有機的な関連が認められると思われるいくつかの否定を表わす例（段氏15部）を典型としてとり上げて、詳細に段注そのものを読むことにする。王引之はいずれも一括して「無・母・亡・忘・妄」、「不・丕・否」のように述べ各字に一定の解釈を与えるのみ（巻十）であるが、段氏は一見して大いに異なるからである。即ち、段氏の古音説が假借説（同音・合音を基本とする）とどのようにかかわるのか、立説の根拠を考える一助としたい。

本稿における訳出の体例は凡そ次の如くである。

1. 助辞は、一般にそれと認められるもの（段氏は後述のように明言せず、用法として示すのみであるから）とし、所謂段氏15部に属す末・蔑・莫・微・没・非とする。15部とは所謂「脂部」で、「之」「支」各部と画然と分けたことは音韻学史に於る段氏の大きな業績と賞されるが、後の視点よりすれば不備な点が認められる典型的な部でもあるからである。^②従つて、この部に属す文字の音と義との関連に注目すべきであると考えられるからである。

2. 各字の見出しは楷書とするが、次に（ ）内に小篆を挙る。段注が小篆の形に基き本義・六書を説く説解ごとに段落に分けて訳出する。

3. 段氏論説の根拠、意図を明確にするために必要な補注Vは可能な限りこれを記す。

（例）^③
⁶上¹⁶末（末）：「六篇上21葉ウラ」にある意。

1. ^上6_{21b} 末 (末)

① 木の上は末という。「木」を構成成分としてもち、「上」(上)を構成成分としてもつ。

① この篆文は各本は「木」に作り[△]、解いて「從木、一在其上」という。今『六書故』(宋、戴侗)が引く唐本(『説文』)に據つて正す^{△2V}。莫撥切(マツ)。15部。

(また)『六書故』は「末、木之窮也。因之為末殺・末滅・略末。又與蔑・莫・無聲義皆通(末は、木の窮である。これに因んで「末殺」(そこなう)・末滅(つきる)・末略(こまかく小さい)となる。さらに又蔑・莫・無と声義が皆て通じる^{△3V})」という。

『禮記』(檀弓上)は「末之ト也」といい、『論語』は「吾末如之何。末由也巳」という^{△4V}。

△補注▽

1. 大徐本は「木、木上曰末、从木一在其上」(莫撥切)、小徐本は「木、木上曰末、從木一其上也」(門撥切)とある。

2. 戴侗『六書故』卷二十一(植物一、本部)には「…末略。與蔑・莫・無同義」(・は大橋による)とある。なお、唐本説文については頼先生『説文入門』(参考文献)に詳しい。

3. 蔑(莫撥切(明母)。15部)・莫(模胡切(明母)。10部)・無(武夫切(微母)。5部)。段説では5部と10部のみ通じるが、声母は全て唇音のゆえに通じる。義は「目に精氣が無い」・「日がくれようとする」・「亡る(なくなる)」で、「ない」と大きく括れるであろうか。蔑については本稿のその条参照。

4. ①『禮記』檀弓(上)「魯莊公及宋人戰于乘丘。…公隊佐車授綬。公曰末之ト也」で鄭玄は注で「末猶微哉、言ト國無勇」という。

②「吾末如之何」は子罕篇と衛靈公篇に、「末由也已」は子罕篇に見える。

△筆者按▽

徐鍇は説解下で「臣鍇曰指事也」という。一般に「末」及び「本」・「朱」は六書で指事とされるようであるが、段玉裁の六書説では「本」も本条と同じく会意（但「从A从B」型）である。

^{6 21 a} 本「木の下は本という。「木」を構成成分としてもち「一」（下）を構成成分としてもつ」

①この篆文は各条では「𣎵」に作り、解いて「從木、一在其下」という。（しかし私の考えでは誤りなので）今『六書故』（卷二十一）が引く唐本『説文』に依つて正す。本・末は皆に字形に於いて字義を得る。その字形は、一つが「木」と「一」に従い、のこる一つが「木」と「一」に従うので、それでその意は他でもなくここに在るとするのだが、『説文』全書ではこのような（誤った）例が多くなつてしまった。「一」はその處を記すことを説い、物の形ではないのである。（また）『詩』大雅「緜」では「本奏（段氏13部・4部）」をば以て「奔走」（13部・4部）」とするが、（同部であるので）假借である。^{へい}布付切（ホン）。13部。

△補注▽

1. ^{10下 16 a} 奏「進也」（側候切、4）・^{10下 9 a} 奔「走也。从夭卉聲」（此13部・15部合音。博昆切、13）・^{2上 31 a} 走「趨也。从大止、夭者、屈也」（子荀切、4）、この段注で「大雅では「本奏」を假りて「奔走」とする」という。

A 𣎵 ○古文

①これは「木」を構成成分としてもち象形である。根には^{あな}竅が多く、口に似る。故に三口（多くの口）に従う。^{上 b} 朱（𣎵）「赤い心の（ある）木で、松柏の属。

②「木」を構成成分としてもち「一」がその中に在る。」

①「朱」本来は木の名であるが、引伸して假借し「純赤」の字とする。糸部で「絛、純赤也」というが、これがその本字である^{△1V}。

②赤い心は像ることができない^{△2V}。故に「一」をばもってこれを識す（即ち、指事文字とする）。（しかし）本・末のごときは像ることができないものではない。（よつて）ここでは今本（二徐の『説文』の説解が指事とすること）が非であると知れるのである。章俱切（シユ）^{△3V}。古音は4部に在る。さらに又按ずるに、この字は説解で解いて「赤心木、松柏屬」というが、（それなら）当然松・櫟・檜・樅・柏の処に廁めるべきである。（ところが）今本ではその舊来の次第を失う。本・柢・根・株・末の五つの文字は（木の部分の名称として）一貫しており、当然中に（類がちがう）他の物（つまり「朱」）をばもって脛るべきでない^{△4V}。（しかしこのように異質なものがつかえているのは）蓋ん浅学な人が類としてこれを居いたために、其の一つ（末）は「上に在り」、他の一つ（朱）は「中に在り」、のこる一つ（本）は「下に在る」とする説に傳会^{△5V}けただけなのであろう。

△補説▽

1. 「あか」と括つて訳せる系統の文字が^{13上14a}絛まで12字並ぶが、その最初にある。

^{13上14a}絛 ①純赤也。②虞書「丹朱如此」③从糸朱聲

①「純」は「醺」に同じ。「厚也」である。「赤」は「南方の色」である。…然であれば則り「朱」と「赤」とは（その「あか」の）深浅が同じではないのだ。…許慎は「纁」とは「浅い絳」、「絳」とは「大赤」という。（即ち）蓋ん「純赤」「大赤」はその異いは微かであらう。…凡そ徑傳では「朱」というのは皆て当然「絛」に作るべきで、「朱」はその假借字である。（なぜなら）「朱」とは「赤心木」だからである。

②…蓋ん六經の「絛」は僅かにここだけに見えるであらう。（つまり）「朱」が行われて「絛」は廢れてしまったからである。

③章俱切。古音は4部に在る。

2. 一般に叙でいう六書の「象形」には「象」を用いるが、段注は假借説により「像」を用いるべきと考える。また下に用いた「識」は指事の条の「視而可識」に見えることから、指事のことをいうと考えられる。この条は当然会意とすべきことを言う。なお「一」は「地」であつたり様々なことをいうのに用いられる指事文字（抽象的なことを表わす）である。

3. 反切下字「俱」は段説では「舉朱切、古音在4部」。また諧聲符の朱・具及び禺は全て「古音在4部」である。

4. 『説文』本来の次第が失われていることについては段氏はしばしば言及し、非難や指摘するだけでなくあるべき次第に改めてしまうこともある。この条については叙の許慎の説（各部首内の所屬字は字義の関連に因るべき）に基くものである。従つて、「朱」は「あかい芯」をもつ木の名前であるから、個別のその類のところ（^{6 21a}松から続く^{20a}柏まで）にあるべきで、木の部位の名称のところ（^{6 21a}本以下^{21b}末）に置くべきでないことに当然なるのである。なお、本の一つ前^{21a}に今日「樹木」と熟す「樹」（「木生植之總名也」）がある。六篇上の部首「木」には五行説での「木」の属性である「酸也」と説かれ、これに因む柑橘類の名称が並び「樹」の前まで配され、ここで一つの意味の区切りがあることが知れる配列になっている。

2. ^{4 32b}蔑（蒙）

①「^つ勞れた目には精（精氣）が無い。

②「^戊」を構成成分としてもち、「^ハ」を構成成分としてもつ^ハ。人が勞れれば則ち蔑然たるさま（よく見えないさま）である。

①目が勞れれば、その時は精氣が茫然となる。（よつて音義が）通じて「^ミ昧」に作る。（その例は）例えば『左傳』（隱公元年）「公及邾儀父盟于蔑」、（文公七年）「晉先蔑」は『公羊傳』（元年）・『穀梁傳』（元年）は皆に「昧」に作るのがこれである^{ハ2V}。引伸の義は「^{サイ}細」となる。例えば「木細枝（木の細い枝）」はこれを「蔑」というのがこれである^{ハ3V}。

さらに又引伸の義は「無」となる。例えば「亡之命矣夫」、また同様に「蔑之命矣夫」に作るのがこれである^{△4V}。(また)『左傳』(襄公二十四年)「醜蔑」は字は「然明」である。この場合は相い反することによつて名字としたのである^{△4V}。

②「戊」に従う意を説く。「戊」は人を取も勞れさせるものである^{△5V}。この十字は『廣韻』(十六屑)・『古今韻會舉要』(九屑)に依つて訂した。

△補注▽

1. 「苜」は113番目の部首で、112𠂔を受け113羊へ続く。四篇のこのあたりには動物が並ぶので「𠂔」は「𠂔」即ち「艸」ではない。(今多くの辞書は艸部に収める。)

①「目が正しくない。「𠂔(羊角也)」と「目」とを構成成分としてもつ。②凡そ「苜」の属は皆て「𠂔」を構成成分としてもつ。「末」のように読む」

①「𠂔」とは(角が)外向きの象で、故に「不正」と爲る。②模結切(ベツ)。15部。

この部に属するのは𠂔「目不明也(木空切。古音在6部)」・𠂔「火不明也(模結切・15)」・蔑の三字で、「不明」が共通の義となるもののみ収める。また戊は^{14下b}「威也。九月易气微、萬物畢成、易下入地也」③五行土生於戊、盛於戊④从戊一④一亦聲⑤凡…」①…火部曰「威、滅也」、本『毛詩』傳「火死於戊。陽氣至戊而盡。故威从火戊。此以威釋戊之恒也。……とある。従つて「从A从B」型といえようか。

2. 文公七年の条については、『公羊傳』は「昧」に作り、『穀梁傳』は「蔑」に作る。(後述△参考▽参照)。

3. 『方言』卷二に「木細枝謂之抄、江淮陳楚之内謂之蔑」とある。

^{13上a}細「①𠂔也②从糸凶聲」

①「𠂔」とは「𠂔」である。𠂔は今の「𠂔」字である。(『説文』に「𠂔」はない)②穌計切(セイ)。15部。

従つて、段説では共に15部となり、通じる条件を満たす（後述参照）。

4. ①『論語』「雍也」篇。「伯牛有疾。子問之、自牖執其手、曰「亡之。命矣夫。斯人也、而有斯疾也。斯人也、而斯疾也」（冉伯牛の病いが危篤状態であつた。見舞いに行かれた先生は窓からその手を取りながらいわれた。「こんな道理があるはずがない。これが運命というものだろうか」と。）

注・疏及び校勘記全て「亡」と「無」・「蔑」の関係については一切言わない。しかし『讀書雜誌』「漢書第十二・霍光金日磾傳」で「宣元六子傳曰「蔑之命矣夫」、『論語』「雍也」篇作「亡」とあるので、王念孫の説にここは従つたか。

なお、邢疏では「伯牛、冉耕之字也」といい、名と字は密接の関係あることをいうが、後述段注の伏線であろうか。また解釈については亡^{12下46b}「逃也」の段注で「亡は「死」でなく、「無」と双声である」とする説参照（拙稿「助辞ノート（二）」）。

②『漢書』「楚孝王劉囂傳」「蔑之、命矣夫」顔師古注「蔑、無也」。

この用法は『易』「剥」など多くあるが、『漢書』同条を引いたのは、①の王説との関連か。

5. 『左傳』襄公二十四年

「程鄭問焉、曰敢問降階何由。子羽不能對。歸以語然明……杜預の注に「然明、饒蔑……饒、子公反」とある。

△参考▽

^{上a}46 昧（昧）①「目が明くならない。②「目」を構成成分としてもち「末」^{バツ}がその発音」

①「呉都賦」（『文選』卷五）に「相與昧潛險、搜怪奇（相ひ與に潛險を昧し、怪奇を搜す）」とあり、劉は（注して）「昧」^{バツ}「冒」^{バウ}也」といい、李善は（注して）「説文では昧は門撥切で、^{かくれる}潛隱の穴に之く^ゆという謂である^{いみ}」という^{ハ₂V}。「撥」は俗本では「廢」に作る^{ハ₂V}。②莫撥切（バツ）。15部。

△補注▽

1. 同『文選』の「吳都賦」では「昧」ではなく「昧」に、「怪」を「瓌」に作る。二氏の注も「昧」に作る。
2. 大徐・小徐の反切。「撥」は入声だが「廢」なら去声となる。

なお、この「昧」は「昧」とまぎれやすいようで、実は隱公五年、文公七年の前述の条も次のようである。

①隱公五年

（『左傳』）三月、公及邾儀父盟于蔑。邾子克也。……

（『公羊傳』）三月公及邾婁儀父盟于昧、及者何、與也。

（何休「注」）昧、亡結反。穀梁同。左氏作蔑。

（『穀梁傳』）三月公及邾儀父于昧

（范甯『集解』）昧音蔑、地名。左氏作蔑。注下皆同。

「校勘記」は次のようにある（『公羊傳』のみ）。

唐石經・監本・毛本同。閩本「昧」作「昧」……「于昧」『穀梁』同。『左氏』作蔑。『石經考文提要』云「宋景德本・宋鄂洋官書本皆作「昧」。按『說文』「昧、从目未聲」與「昧」未聲字別。「昧」與蔑古音同。

これより、「按『說文』」以下の文は、「昧」として考えると段説に合う。

②文公七年

（『左傳』）宣子曰「我若受秦。……至于剗首、己丑、先蔑奔秦。先蔑之使也。……」

（『公羊傳』）戊子。晉人及秦人戰先昧以師奔秦。……（注「釋文」）。昧音蔑。左氏作蔑。

（『穀梁傳』）戊子。晉人及秦人戰于令孤、晉先蔑奔秦。……

『公羊傳』の校勘記で次のようにいう。

段注の否定を表わすいくつかの助辞について

唐石經・鄂本、閩本同。監本「昧」誤、「昧」下同。段玉裁云「从未、是也」、解云「『左氏』・『穀梁』作「先蔑」

従つて、段玉裁の説が「隱公五年」の条での校勘記に影響を与えていたと思われる。また段氏が見た本は、十三經で採られたものと異なるのであろうか、それとも、自らの説によつてあるべき姿を主張したのにであらうか。そのいずれであるにしろ、「文公七年」の条の『公羊傳』の校勘記は、段説に従うように思われる（前述8頁他参照）。

また、^{4 11}に昧（睞）があり、「○目不𠄎也」○从目未聲」と昧と同じ説解が付くが、段注は次のようにいう。

○今音（『広韻』）では昧は末韵（入声）に在り、昧は隊韵（去声）に在る。「未」に从う字であることを攷え、『公羊傳』・『穀梁傳』の二傳及び「吳都賦」に見えることから、「未」に从う字は、未だこれを見たことがない。（また）其の訓は皆に「目不𠄎」であるのに何類としてまとめて居かずに二処に畫分るのか。且つまた『玉篇』では睞・𠄎二字の間に於て、「昧、莫達切。目不明」という。

『説文』の舊來の次第（「目がわるく見えない」系）に依れば、他でもなく文字の本來の書き方が知れるのだ。（つまり）「未」に从う昧が當然ここに在るべきである。（しかし）浅学の人が改めて「未」に从うとしたので、つまりさらに又「未」に从う昧を前に増したのであろう。○莫佩切。15部。

つまり、音（入声）と義（見えない）を考へて昧ではなく昧をここ（^{4 10 a}眛から^{12 a}瞶までの一連の「みえない」系文字群の中）におくのが説文の文字の次第の本來の姿であるとする。江沅の『説文解字音均表』十五部では「未」を諧声符とするグループに於て「昧」を載るが「削るべきである」と述べる。

また、「莫佩切。15部」は「昧」に應じる。

^{7 2}上^a眛（睞）^マ（睞）^マ「○昧爽、且に𠄎けようとするである」○「日」を構成成分としてもち「未」がその発言^{あるいは}「一に曰く「闇也」である。

②…「且明」とは、まさに明けようとして未だ明けていないということである。……「昧」とは未だ明けないことであり、

「爽」とは明けるである。(それで昧爽と)合して「まさに日がのぼろうとする」^{いん}偏となる。③莫佩切、15部。④^{12上}闇^{13a}とは「門を閉じる」である。門を閉じれば光は明るくない。(よって)「明暗」という場合の字はこの字を用いて、^{7上}暗^{8a}を用いないのだ。「暗」とは「日に光が無い」であって、義が異なるからである。……

この反切をもつ字も「明るくない」から「くらく」、「見えない」と義が伸びて混乱を来したように思われる。

3. ^{2下}15微(微)

①隠れて行くである。

②「イ」を構成成分としてもち「散^ビ」がその発音。

③『春秋傳』に「白公其徒微之(白公其の徒を微^{かく}す)」という。

①「散」は「眇^{ベウ}」と訓み、「微」は「イ」に従い「隱行」と訓むのに、段借して通じて「微」に用いるので^{11V}、「散」(自体)は行われない。

(『詩經』)邶風(「柏舟」)に「微我無酒(我に酒無きに微^{あら}ず)」とあるから、さらに又微を假りて「非」とする^{12V}。

②無非切(ヒ)。15部。

③『左傳』哀公十六年の文で、杜(預)は(注して)「微、匿也(かくす)」という。(これは)『爾雅』「釋詁」が「匿、微也」であることと互訓である^{13V}。(しかしこれは)皆に^{とも}「隱^{かくす}」をいい「行^{いく}」(の部分)をいわないので、「散」の段借字である。(従ってこの条は『左傳』つまり)伝(注釈)を稱^あげて段借を説くものである。

△補注▽

1. ^{8 19}上_a散「¹眇^{べウ}（小さい）である②「人」を構成成分とし「支」を構成成分としてもち「豈^キ」の省略体がその発音。
①…凡そ古に「散眇」というのはつまり今の「微妙」である。「眇」とは「小也」である。引伸して凡そ「細^{いい方}」の偏とする。微とは「隱行也」であるが、微が行われるので散が廃れてしまった。

②徐鉉らは^(5 36)上_b豈字は散の省略体に従う（墟豸切。15部）というが、散は当然豈に従うべきではない。耑の省略体に従うべきであろうと疑う。（なぜなら）^(7 3)下_a耑は「物初生之題（物が初めて生じる題^{はじめ}）」で尚おさらに「散（小さい）」からである。無非切（ビ）。15部

③

①^{4 12}上_a眇「①小さいである②「目」と「少（不多也。2部）」とを構成成分としてもつ（「目」が「少」い）」。

①…按えるに、眇は「小目」と訓むので引伸して凡そ「小^{セウ}」の偏^{いい方}と爲る。さらに又引伸して「微妙」の義と爲る。『説文』には「妙」字は無いので、「眇」が即ち「妙」である。……②徐鍇は「会意である」という。按えるに、少^{セウ}であれば小であるので、故に「从少、少亦聲」である。亡沼切（ベウ）。2部

なお、眇は^{4 10}上_b眇「目傷眇也。从目多聲。一日眇兕也」に始まり^{4 13}上_b曹「目不眇也。从目弗聲」に至る文字群の中に位置する。

②^{7 3}下_a耑「①物が初めて生じる題^{はじめ}である②上部は生じる形に象る③下部は根に象るのである④凡そ「耑」の属は皆て「耑」に従う」

②「才」・「屯」・「韭」字をばもって例とせよ。「一」は「地也」で、「艸」は初めて生ずるさまに象る。（拙稿「読段注助辞ノート（一）」他参照。）

③「一」の下が則^{つま}りその根に象るのである。多官切（タン）。14部

③^{5上}_{36b} 豈「……③豆に从う④散の省聲……」

④「散」は（大小徐）各本「微」に作つて誤る。今鉉本（大徐）の「散」下の注語（臣鉉等案、豈字从散省、散不應从豈省。孟傳寫之誤。疑「从耑省」、耑「物初生之題」、尚散也。無非切）に依つて正す。墟猗切（キ）。15部。按えるに、徐鉉は「猗」（虚豈切、15部）は「喜」（虚里切、1部）に作り誤る。

1部と15部を分けたのは段氏の古音説の真骨頂であるからこのように説くのである。

2. 『詩』邶風「柏舟」（五章 章六句）の五句目。

「凡彼柏舟、亦汎其流、耿耿不寐、如有隱憂、微我無酒、以敖以遊」で鄭玄は注で「非我無酒、可以敖遊、忘憂也」といい、「微」を「非」と解す。なお『詩經小學』、『毛詩故訓傳』共に何も言わない。

3. 『左傳』哀公十六年

秋七月：乃從葉公、使與國人以攻白公、白公奔山而縊、其徒微之

杜預注（引「釋文」）：微如字、匿也。『爾雅』云「匿、微也」、匿、女力反

孔穎達疏。正義曰「（『爾雅』）「釋詁」云「匿、微也」：

なお^{12下}_{47b} 匿「①亡也②从二若聲③讀若羊騶箠」では次のように段氏は述べる。

①『廣韻』は「藏也。微也。亡也。陰姦也」という。②これは雙聲を取つて形聲としたのである。③ここでは譌奪がある。当然「讀若羊箠箠之箠」というべきである。（なぜなら）金部^{14上}_{23b}で「箠、（①羊箠也。②从金執聲。）讀若至（脂利切。15部）」というからである。「至」は古音は「質」に同じなので、匿は箠のように読み、即ち質（之日切。12部）のよゝに読むのである。古くはまた同様に「尼質切（娘母）」に読み、12部に在つたが、今音（『廣韻』ではというと「女力切」（1部）である。

このように、『説文』では「微」と「匿」とは互訓にならないので他の例を引いたのであろう。また、『廣韻』のいう亡・

藏は段10部で合音となるが、『説文』のように若声^(下₄₅a)「順也・然也。乃也。汝也。5部」なら合音とならないので、所謂戴震の説によつて双声によるものと説いた。12部と15部は合音となりうる。

また、藏は『説文』になく、^{3下₂₄b}臧「○善也○从臣戕聲」で次のようにある。

①：按ずるに、子郎(精母)・女郎(從母)の二つの反切(発音)があるが、本来は^{ことなる文字}二字はない。凡そ物が善いものであれば必ず内に隠す。艸に従う藏をばもつて臧匿(意味)の字とするのは漢末に始まり、經典を改易^{あらた}めたので従うことができない。さらに又臧私(意味)の字は、古くは同様に臧を用いた。②則郎切(精母)。10部。

4. ^{11上₃₃a}没(濃)

①湛^{ヂン}(しずむ)である^{ハ₁V}。

②「水」に从い「𣶒^{ボツ}」の聲

①「湛」は各本(大・小徐)は「沈」に作る^{ハ₂V}。浅学の人が今字をばもつて改めたからであるので、今正す。没とは、すっかり全く水に入ることであり、故に引伸の義は「盡^{ジン}(つくす)」に訓むのだ。『詩』小雅(「漸漸之石」「曷其没矣」「曷ぞ其れ没^めきん)では、「曷其没矣」は伝で「没、盡也」という。『論語』(鄉黨)「没階(階を没^めせば)」「(注)で、孔(安國)は「没、盡也」という^{ハ₃V}。(これらから)凡そ貪没(むさぼる)、乾没(横取りする)は皆「沈溺(おぼれる)」の伸引である。②莫勃切(ボツ)。15部。

△補注▽

1. ^{11上₂₂b}湛「没也(しずむである)②「水」に从い「甚^{ジン}」の聲……」

①古書では「浮沈（しずむ）」の字は多く「湛」に作るので、湛・沈は古今字（の関係にある）である。「沉」は「沈」の俗体である。後述して「没、湛也」というので、二字は転注である。

②按ずるに、直林切（チン）で、7部だ。大徐は宅減切だが、古義・古音を知らないからなのである。凡そ湛字は引伸の義が甚だ多いのでその音は不^{さふ}一である。（しかし）其の古音はというと他でもなく同じで、直林切だけなのである。

2. ①大徐「沈也。从水从豊聲」（莫勃切）

②小徐「沈也。従水豊聲」臣錯豊音没、謀骨反。

3. ①小雅・魚藻之什「漸漸之石」（三章、章六句）の二句目。

「漸漸之石 維其卒矣 山川悠遠 曷其没矣 武人東征 不皇出矣」で、鄭玄は注で「没、盡也」という。

②『論語』郷黨

入公門、鞠躬如也。……屏出、降一等、逞顔色、怡怡如也。没階趨進、翼如也。復其位、蹶蹶如也。

（注）孔曰「没、盡也。下盡階」

5. ^{11下}₃₂ 非（鼎）

①韋（たがう）である。

②「飛（飛）」の下部の𠂔に从う^{11下}。

③其の背^{そむ}く意を取る。

④凡そ「非」の属は皆て「非」を構成成分としてもつ

①「韋」は各本^{△2}「違」に作るの、今正す。「違」とは「離也」で、「韋」とは「相背也」であるが^{△3}、「違」が行なわ

れてから「章」が廃れ、盡く「章」を改めて「違」とした。ここはその一つである。「非」は「相背」をばもって本義とするのであり、「離」をばもって義とするのではない。

②「飛」の省略体でしかもその下部が其の瑕であるのに从うを謂う（その意である）。

③瑕が垂れば、その場合はつまり相いに背く象があることになり、故に「非」といい、「章」である。甫微切（ヒ）。15部。

△補注▽

1. 非は429番目の部首で428番目の「飛」の形を蒙けて建つ。飛とは象形で、段注は「象舒頸展瑕之狀（頸が伸び瑕が展びひろがった状態に象る）。甫微切。15部」という。

2. ①大徐「違也。从飛下瑕、取其相背。凡非之屬皆从非」（甫微切）

②小徐「違也。從飛下瑕、取相背也。凡非之屬皆从非」（甫肥反）。

3. ①^{下b}28違⁺「①「離也（はなれる）」である②「𠂔」に从い「章」の聲」

②羽非切。15部。

②^{下b}39章「①対象に背くである②舛に从い□の聲③獸の皮は章④（その章で）物を束ねることができるので（もとの状態を）枉戻してそれに章背く④故に借りて（これをば）もって皮章と爲る⑤凡そ「章」の属は皆て「章」を構成成分としてもつ」

①故に「舛（たがいちがい）」に从う。今、文字は「違」が行われて「章」の本義が廃れてしまった。……②字非切。15部。

③この章は当然「圍」に作るべきで、「繞也」と謂ういみである。

④「物」字は『古今韻會（舉要）』に依って補う。生革は繞圍して物を束ねられるので、それでもって矯めて枉戻する

ことができるので、その故に背くのである。本来の姿

⑤其の初めは革で繞して物を束る（意）の字として用いたが、其の後には凡そ革は皆て韋と偁う。これは西・朋・來・子・鳥の五字の下の説解に於ける表現法と同じで、皆て假借の愼を言うのである。假借（義）が専ら行われて本義が廃れてしまった。

假借については叙の六書説・五字の各条参照。また、拙稿「文字字階梯六」「用」―その②假借（2007 全国漢字漢文教育学会・『新しい漢字漢文教育』43号）参照。

6. 12下a弗（弗）

①矯也（ためる）である。

②「丿」と「㇏」とを構成成分としてもちへいゝ、

③「韋」の省略体を構成成分としてもつ

①「矯」は各本「擣」に作るの、今正す^{△2V}。（なぜなら本来）「擣」とは「擣手也」で、引申して「高く挙げる」として用いるからであり、「矯」とは「揉箭箝也（やはすをためる）」で、引申して「矯拂」として用いるからである^{△3V}。（しかし）今人は（この異を）辯けることができなくなつて、久しい。

「弗」の訓は「矯也」だが、今人は矯・弗皆に「拂」に作り、そうして用いて「不」とする。その誤りは蓋ん同様にまた久しくなつてしまった。

『公羊傳』（僖公二十六年）は「弗」とは「不之深也（「不」の深いもの）」というが、固より是れは「矯」の義である。凡そ経伝で「不」という場合は、その文は直で、「弗」という場合は、その文は曲である。例えば『春秋』（『公羊傳』・文公八

年)に「公孫敖如京師、不至而復」、(また文公十四年)「晉人納捷菑于邾、弗克納」とあるのが、弗と不の異いである。『禮記』(樂記)は「雖有嘉肴、弗食不知其旨也。雖有至道、弗學不知其善也」である⁴⁴。(以上より)弗と不とは互いに易えることができないのである。

②「フ」「フ」は皆に矯る意⁴⁵がある。

③「韋」とは「相背也」である⁴⁶。故に構成成分として取って、会意とする理由である。或いは左にし或いは右にして(矯めて)、皆に背いて矯めることを謂う(意味である)。分勿切(ブツ)。15部。

△補注▽

1. 弗は46番目の部首である「フ」(フ)部に属す。

^{12下}_{31b}「フ」又戻也(又より戻る^{みぎ})である。ナに引く形に象る②凡そ「フ」の属は皆「フ」を構成成分としてもつ

④又・ナは(大徐・小徐)各本は右・左に作るの、今正す。「戻」とは「曲也」である。(だから)右戻とは、右より左に曲るのである。故に其の字は左方向よりこれを引くのに象る。フは音義は略ぼ撃^{12上}_{45a}「飾也(はらう)」。从手敝聲(芳滅切。15部)に同じである。書家は(永字)八法ではこれを惊^{12上}_{45a}『説文』に無い)という。房密切(ヒツ)。さらにまた匹蔑切(ヘツ)。15部。

房密切は臻撮三等真韻開口入声(質)敷母で12部相当、匹蔑切は小撮四等先韻開口入声(屑)滂母。従って、15部であるとするためには又切が都合がよいのでこう記したと考えられる。

「フ」部の末尾「弗」の直後にこれを反転した「フ」を体例に従って配す。

^{32a}「フ」(フ)「フ」戻也(左より曲る)である。反転した「フ」に象る。読んで弗^{12上}_{51b}と同じとする

⑤左より右に曲るので、故に其の字は右方向より引くのに象る。フは音義は略ぼ拂^{12上}_{51b}「過撃也(撃ち過ぎる)」。从手弗

聲（敷勿切。15部）に同じである。書家は八法ではこれを磔タツという。分勿切（フツ）15部。

或ひとが「篆は何ぞ（ノ部の部首であるノの次で）又・弗の前に配次しないのか」と問ずねる。（それにこたえて次のように）いうのだ。「ここではノをばもって部首とする。故に必ずノに从う字が列し畢わって、そうしてその後に反背そむくする形を列べるのである。又（从ノノ相交）・弗（从ノノ）は皆いづれも「从ノ」に系かかわるからである。」と。

2. 大徐「橋也。从ノ从ノ。从韋省」（分勿切）。臣鉉等曰韋所以束枉戾也。

小徐「橋也。從韋省從ノ」。臣鍇曰弗者違也。分勿反。

3. ①^{12上a}₄₁橋キョウ「①舉手也（手を挙げる）である。②「手」に从い「喬キョウ」の聲③一に橋は、「擅也（ほしいままにする）」であるという」

①これを引申して、凡そ挙げるは皆橋という。古くは多く矯を段りてこれとした。……②居少切（キョウ）。2部。③擅センとは專センである（^{12上a}₄₂）。凡そ「橋詔（いつわる）」は当然この字を用いるべきである。

②^{5下b}₂₂矯キョウ「①揉箭箝也（箭箝やがらを揉る）である②「矢」に从い「喬キョウ」の聲。」

①揉は当然「柔」に作るべきである。許（慎の『説文』）には揉が無く柔・揉があるからである。「箭」とは矢竹の矢となる部分である。矢といわずに箭ということについては、矯めは箝やがら（矢の竹の部分）に施し、鏑羽やじり（矢のさきの羽）に施さないからである。箭は籥5上a₁₄「箝也。从竹爾聲（尼輒切。古音15・16部）」であるから、箭の箝を柔かくすることが矯というのである。引伸して凡そ矯枉（ためてまっすぐにする）の偏いひかたと爲なる。凡そ矯詔（いつわる）とは、本来そうでない（然ラズ）のにそうである（然リ）ということである。②居夭切。2部。

4. ①『公羊傳』僖公二十六年「二十有六年春、王正月、己未。……齊人侵我西鄙、公追齊師至禚弗及。其言至禚弗及何。

修也。」

（何休注）弗者不之深者也。

② 同文公八年「經八年……冬十月、……乙酉……公孫敖如京師、不至而復。丙戌、奔莒。」

③ 同文公十四年「經十有四年、……七月……晉人納捷菑于邾。弗克納。」

②・③ いずれも弗に言及する注はない。また同桓公十年には同様の何休注が見える。

秋、公會衛侯于桃丘。弗遇。會者何。期辭也。其言弗遇何。公不見要也。

(注) 弗者不之深也。起公見拒深傳言公不要見者、順經緯文。

(疏) ……言弗遇、是未見之偶。……

④ 『禮記』『樂記十八』は学問の目的、教育の方法・教師の責務などについて述べ、大学篇と共に儒教における学問の重要性を論じて有名である。特にこの条は「困学」・「知不足」などの典拠として広く知られるが、段氏の教育・学問論あるいは実証の意義を説くかと思われる点で、興味深い例の挙げ方と感じる。

雖有嘉肴、弗食不知其旨也。雖有至道、弗學不知其善也。是故學然後知不足、教然後知困。知不足、然後能自反也。知困、然後能自強也。故曰教學相長也。命曰學學半、其此之謂乎。(どんなにうまい料理であつても、食してみなければ、その真のうまさかわからない。そのように、どんなに善美な知識や法則があつても、それを学び自ら会得しなければ、その真価はわからない。また、學んで初めて自らの知恵が足りないことを知り、教えて初めてその難しさを知る。このように足りないことを(確かに)知って、そうして後に十分自ら反省することができる。困難であることを知り(困しんで)、そうして後に十分自ら一心に努力するのである。故に(昔より)教えることと學ぶことは互いに助けあう(教え學んで成長する)というのである。「兌命」に「人に教えることは自らが學ぶことの半分である」というのはこの意味であろうか。

⑤^{12上}₂ 不^a ①鳥飛上翔不下來也②从一、一猶天也③象形④凡不之屬皆从不」で段注は次のように弗との異いについて述べる(拙稿「読段注助辞ノート(二)」参照)。

①凡そ「そうではない」ということについては、皆てこの義での引申段借である。（その場合の）その音は古くは1部に在り、徳韻の北ホクのように読んだが、音が転じて尤有韵に入り甫鳩・甫九切（フ）に読む。弗字とは音義皆に殊る。音が殊るとは則り弗は15部に在るのである。義が殊るということについては、則り不は軽く弗は重いのだ。例えば「嘉肴弗食、知其旨……」「公羊傳」に「弗者不之深也」とある。（よつて）俗に韵書では「不同弗（不は弗に同じである）」というが、是ただしくない。

5. ^{5下}₃₉ 韋 ①相背也（背きあう）である②「舛」に従い「𠂔」^キの声③獸皮の韋④（韋でもつて）物を束ね枉戻し韋背きあうことができる⑤故に借りてこれをば皮韋と爲る⑥凡そ韋の属は皆韋に従う

①故に舛（^{5下}₃₈）「對臥也。从𠂔𠂔相背……」に従う。今字は「違」が行われて韋の本義が廃れてしまった。∴②字非切。15

部。④……生韋は縷なまかわ圍めぐらし物を束ねることのために、矯めて枉戻してそうして故（本来の状態）に背くことができるからである。

（本稿「非」の△補注▽参照）。

注

- （1）転注と假借については『説文』十五篇上の叙、及びそれに付された段注参照。また転注については河野六郎氏の説参照（『文字論』（1994・三省堂）所収他）。また拙稿『文字学階梯（五）（六）』（全国漢文教育学会、2007年）参照。
- （2）頼惟勤監修・説文会編『説文入門』（1983・大修館書店）参照。
- （3）拙稿「読段注 助辞ノート（一）」（『二松學舎大学論集』第四十八号、二〇〇五年三月）他の体例など参照されたい。

主要参考文献

- 近藤光男『清朝考証学の研究』（研究出版）
王引之『経傳釋詞』
劉淇『助字辨略』
『春秋公羊傳何休解詁』岩本憲司（汲古書院2001）
『春秋左傳』小倉芳彦（岩波文庫）
『論語』金谷治（岩波）、吉川幸次郎（朝日新聞社）、貝塚茂樹（中央公論社）
新釈漢文大系（明治書院）礼記・論語・詩経
宗福邦他編『故訓匯纂』（商務印書館2003）